



かかやく子ども

～自立と共生の礎を培い、今と未来を豊かで創造的に生きる子どもを育てる学校～

もっとチャレンジ!～かんがえる子ども すすんでする子ども 共に生きる子ども～

“自立と共生”

“社会へはたらきかける力”

のもとになるもの…

朝
高学年と1年生の兄弟が同じ通学班で登校してきました。弟くんはお兄ちゃんの後をちゃんとついて来ているし、お兄ちゃんもそのことをよくわかっていながら、ときおりチラと弟くんを振り返っています。

そして、私からの「おはよう!」に、まずお兄ちゃんとその友だちが…、続いて弟くんからも…、「おはようございます」が返ってきます。

近ごろ、子どもたちと「おはようございます」や「さようなら」などを気持ちよく遣り取りできることが多くなりました。授業中、「なにをしている(学習している)の?」と尋ねても、それなりのまとまった答えが戻ってくるが増えてきました。そんなとき、私はできるだけ「ありがとう。とてもよくわかったよ」と伝えるようにしています。

もちろん、いつも同じように感じられるわけではありません。ほぼ毎日、校門近くに立っているうちに、改めて気づいたこともあります。つまり、“(何人かの子どもは、)あいさつをしないのではなく、できないのだな”という新発見みたいなものです。

「アイサツ ショウト オモッタノニ ナゼ
ダカ コトバガ デテコナカッタノ…」

さて、私の発見があながち間違いばかりでないとしたら、“あいさつできない”のは、普段からそういう習慣がなくて、いざというときに心がすぐに動いてくれないからでしょうか。

それとも、理由は体の方にあるのでしょうか。



《5月24日の学習参観の風景から》

例えば、体の各部位を動かすにはそのための筋肉や関節などがちゃんと働かなければならないのですが、それは、「おはよう」や「さようなら」「ありがとう」などを発する場合も同じはずで、だとすると、そのための筋肉や関節などをずっと使わずにいるうちにその辺りが強張ってしまうということがあるのかもしれない。

ただ、どちらにせよ、以前、子どもたちに話したことがあるとおり、

「人間だもの。あいさつを忘れてしまうこともある。したくないときもある。もらったあいさつに気づかないときもあれば、せっかくだあいさつが届かないときもある」

のですから、あいさつをしないからと言ってその人の口を無理矢理こじ開けることはできません。

そんなやり方ではなくて、自分自身がモデルとなって、気持ちよくあいさつする姿を示しながら、声かけを続けていく…。

それは、大人の役目であるし、私はそれを“家庭(保護者)”と“地域”と“学校(教職員)”とで、もっともっと一緒にやっていきたい、広げていきたいと思います。

※ 実は、私たち教職員も来校いただいた方などにきちんとごあいさつできないことがあって、そんなときは反省しきりになります。

同じく朝

通学班から少し離れ、ある6年生が一人の1年生と一緒に学校に向かってきました。

その6年生が1年生の歩く速さに合わせているのは一目瞭然。なにか訳あって遅れていたのでしょうか。

「連れてきてくれたのかい!？」

普段、よほどよく知る大人（教師）以外には口数の少ない彼が、それでも「ウン」と頷いてくれました。

…彼には彼の優しさがあります。

同じようなことですが、通学途中の溝にはまってしまった下学年の子どもをまだ保護者のおられるお家にまで送り届けてくれた6年生もいます。

※ ここで記した6年生の姿をとともうれしく思います。ただし、学校では、安全のために、“登校は通学班で” “一旦、家を出れば、途中で戻らない” ことを指導しています。

昼休み

5月中旬のある昼休み。5年生の何人かが1年生と遊んでいました。長縄を使った綱引きの真似事みたいです。

中学年ごろには、その学童期にふさわしく立派に(!?) やんちゃなところもあった5年生たち。遊ばせ方は心得ていますとばかり…、とにかく1年生が大喜びでした。

※ ※ ※

高学年の子どもたちに「下学年の子どもたちへの影響力は、先生たちよりもみんなの方がよほど大きいときがあります」と言ったことがあるのですが、今回はまったくそのとおりのことがよい面で現れた例でした。

学校では本年度、『授業づくり、学力向上』とともに、『自立と共生、社会へのはたらきかけ』に取り組んでいます。

上手くいっていることばかりではありません。でも、今回紹介したような子どもたちの姿を励みにし、その姿をより確かなものに、いろいろな場面で見られるものにしていきたいと思います。 (清水 康行)

「授業づくり、学力向上」のもとになるもの…

全国学力・学習状況調査の結果などにも現れているように、成長期にふさわしい『規則正しい生活』と『家庭での学習習慣』が子どもの学力に大きくかかわります。

学校では、1～2年用、3～4年用、5～6年用に「家庭学習の手引き」をつくってお配りしています。

そこでは、お家での学習時間のめやす“1～2年生で20分間” “3年生30分間、4年生40分間” “5年生50分間、6年生60分間” や各学年に応じた“家庭学習のヒント”を示しています。

いずれの学年でも“自主学習ノート”を活用していますので、お子さんの学習内容も上手に把握していただければありがたいと思います。(1年生は2学期以降に使っていきます。)

鳥の死骸に注意!

おそらく、他の鳥に襲われたのだろうと思われませんが、校地のなかで幼鳥や若い成鳥が死んでいるのを見ることが続いています。生き物の動きが活発な季節ですが、そこには当然、自然界の厳しい側面も含まれるのだと言うことに思い当たります。

鳥インフルエンザの心配はあまりありませんが、念のため、学校ではその都度、死骸を片付け、石灰を播いて付近を消毒しています。また、子どもたちには素手で触らないように指導しています。